

# 刊記を疑う

## － 校合調査に基づく刊年・印行年の推定 －

### 和漢古典籍研究分科会

駒澤大学図書館	松下 賢
成城大学図書館	高島 みなみ
中央大学図書館	八木 彩香
鶴見大学図書館	堀 はな恵
立正大学図書館	小此木 敏明
早稲田大学図書館	藤 順一

### 1. はじめに

和漢古典籍資料の目録作成において、出版年不明としてしまっている資料についてどのようにしたら刊年や印行年を推定できるのか、刊記の記載年をそのまま刊年として記録しても良いのか、という課題が存在する。今回これらの課題を解決する一つの方法として「校合」を選択し、研究テーマを「刊記を疑う・校合調査に基づく刊年・印行年の推定」とし、会員所属校の古典籍資料を用いて校合調査を実施した。なお、校合は「他の書物の本文と較べ合わせて、何れがより正しい本文であるかを考究しようとする事」（『日本書誌学用語辞典』）と定義されているが、本研究では、本文を比べ合わせることは必ずしも含まず、広い意味で複数資料を比較・検討する、という意味で校合という言葉を使うこととする。

### 2. 刊年・印行年の判断方法について

校合調査の事例を紹介する前に、刊年・印行年をどのように取り扱うのか、NIIやNCR、研究者の意見を確認したい。

まずNII コーディングマニュアル（和漢古書に関する抜粋集）やNCRをまとめると以下のようになる。

・出版年(PUBDT)は刊記の記載があれば刊記

から、記録する。

- ・刊記がなく、序文・跋文その他情報源から得られる場合は、情報源を示す語を付加する。
- ・出版年が推定できない場合には「[出版年不明]」と補記する。

NIIやNCRの方針は原則一致しているが、その内容は記述方法が示されているだけで、刊年・印行年の判断は目録担当者に委ねられていると解釈できる。通常目録作業であれば、この運用に則って目録を作成すれば問題はない。しかし、古典籍資料の刊印という性質上、安易に目録を作成してしまうと正確な目録とならない可能性がある。

続いて、長澤規矩也・堀川貴司・中野三敏・大沼晴暉氏ら研究者の論稿等を確認したが、刊年・印行年をしっかりと判断し、それぞれで記述することが理想であるとしながらも、明確な判断方法は示されていない。

刊年・印行年を判断するには、資料への精密かつ正確な調査が必要であり、他伝本との校合も一つの方法だということが確認された。

### 3. 事例①『科註妙法蓮華經』

ではここから、実際に校合を実施した事例を見ていきたい。まずは『科註妙法蓮華經』（以下『科

註』という仏教経典で、10種類の版本を確認した(表1)。それぞれ刊記部分には寛永8年～元禄4年までの記載があり、そのうち8種類には「刊」「新刊」「開板」「板行」など、記載年に版木を作成して刊行したと受け取れる内容を確認することができた。はたして、これらの記載を信じて目録を作成しても問題ないだろうか。元禄4年の資料には「埋木」という処理が施された痕跡も確認された。

まずは刊記丁において校合を実施した(図1)。それぞれ見ていくと、寛永8年と慶安2年では「陀」字の画数が異なり、慶安2年と4年では「レ」の角度、寛文8年は字様が明らかに他と異なる、寛文11年は訓点の「ノ」字が特徴的で、貞享3年では「賢」字の横画が大きく突き出ている。これらの箇所を比較していった結果、刊記丁だけで考えれば、慶安4年と天和3年、寛文11年と延宝4年、貞享3年と元禄4年がそれぞれ同版資料であり、刊印の関係のように思われる。

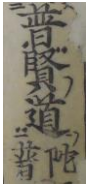



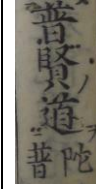
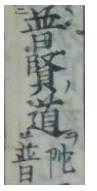

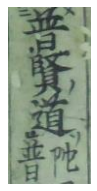

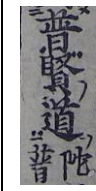
				
寛文11 (1671)	寛文8 (1668)	慶安4 (1651)	慶安2 (1649)	寛永8 (1631)
				
元禄4 (1691) 灰屋	元禄4 (1691) 中村	貞享3 (1686)	天和3 (1683)	延宝4 (1676)

図1:『科註妙法蓮華経』刊記丁校合写真

当然ながら、刊記丁だけですべてを判断できないため、他の巻・丁についても校合を行なった。すべての丁を確認することは煩雑となるため、版心部分や黒口、魚尾、辺、界線など一見して特徴が認められる丁を探していった。こうすることで、

校合調査の精度が上がっていく。

校合において判断した刊印の関係を表2にまとめた。刊記丁の校合結果と一部異なる結果となったので、ここで指摘しておく。まず、慶安4年資料は刊記丁だけの判断であれば、寛永8年と異なる版と考えられた。しかし、全体を校合していった結果、多くの点で寛永8年と同版である可能性が認められたため、慶安4年を寛永8年の後印本と位置づけた。なお、天和3年は刊記丁で慶安4年の後印本と考えられたため、こちらも寛永8年と同版の後印本とした。この3つの資料は刊記記載年が異なるが、出版者が同一のため齟齬は生じないと考えている。

続いて、元禄4年の灰屋三良右衛門資料を欄外に示した。この資料は刊記丁において貞享3年の後印本と考えたが、全体を校合した結果、貞享3年と寛文11年の版木と一緒に使用されていることが分かった。灰屋資料のうち、約7割が寛文11年の版木、約3割が貞享3年の版木を使用していたが、いわゆる取り合わせ本というものではなく、1冊の中にそれぞれの版木が交じっている状態である。同じ元禄4年の中村五兵衛資料と灰屋資料でなぜこのような相違が出たのか、その関係をはっきりとさせるには、更なる調査が必要となる。

校合の結果で目録を作成すると、それまで刊年のみを記載していたものが、後印本として印行年まで記載できることとなった。また、当初独立した版であると思われた慶安4年資料も後印本として印行年を推定できた。

この結果をもととして、端本資料の刊年・印行年を推定することが可能である。例えば、寛文8年資料などは、その字様の特徵から簡単に推定することができる。

『科註』の事例では、刊記に版木の作成を示す「開板」などの記載があっても、刊記の年号が刊行年と一致しない場合があることが確認できた。刊記の記載を鵜呑みにしてしまうのではなく、疑ってみるということも必要である。

#### 4. 事例②『勢多唐巴詩』

事例の2つ目は、『勢多唐巴詩』（以下『勢多』）という狂詩集である。17点確認したところ、すべて明和8年の序があり、日本古典籍総合目録データベースはその年を成立年として記録している。確認した資料の字形などを比較すると、すべて同版資料であることがわかる。しかし、匡郭の割れ等、摺りの状態の違いから考えると、印行年はそれぞれ別の時期であると推定できる。そのため出版年をすべて「明和8序」と一括りにすることには抵抗感が生じる。

そこで各資料の印行年を探るために、刊記や広告等の有無によって、次の3グループに分類し、校合を実施した（図2）。

I 「出版年・出版者名・広告がある資料」  
資料記号：S2・S3・S4

S2

S4

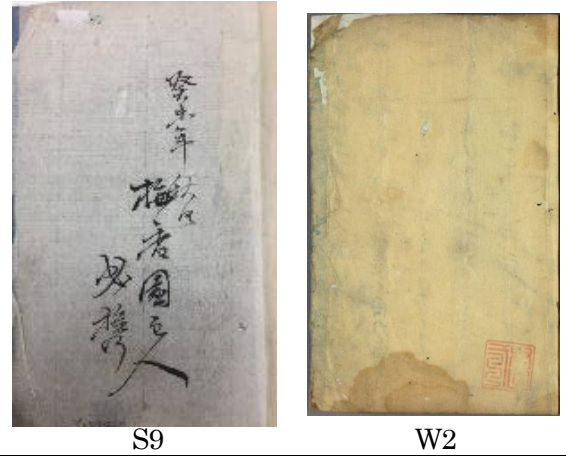
---

II 「出版者名・広告がある資料」  
資料記号：S5・S6・C1

S5

C1

#### III 「出版者名・広告がない資料」 資料記号：S1・S7・S8・S9・S10・K1・W1・W2・W3・W4・W5



※資料記号については表3を参照、写真は一部  
図2：『勢多唐巴詩』の分類

まずIグループのS2とS4を見ると、それぞれ刊記として「明和8年」の記載がみられる。特にS4は資料全体を通して摺りの状態も良く（表3）、広告に掲載されている書名の刊行年も明和8年以前（『前戯録』明和7刊、『諷題三咏』明和8序・跋、『毛護夢先生紀行』明和8刊）であることから、S4は印行年ではなく、明和8年を刊年と推定した。一方、S2はS4と同一の刊記をもっているが、匡郭の一部や広告の書名（『諷題三咏』）の3文字目が欠けているなど、摺りの状態が悪いためS4の後印本と推定できる。ただし、これだけでは印行年の推定の材料としては不足しているので、別グループでの校合結果とも合わせてみていきたい。

次にIIグループのS5を見ていくと、S4よりも摺りの状態は悪く、またS4の広告の書名に加え、明和（『茄子腐稿』明和7刊、『狂詩画譜』明和8刊）・安永（『吹寄蒙求』安永2刊、『太平遺響』安永7刊）・天明（『忠臣蔵人物評論』天明元刊、『花盛金のなる木』天明3刊）年間に刊行された書名が加えられていることから、天明頃の後印本と推定した。C1はS5よりも匡郭の割れが増えていること、広告も寛政（『二大家風雅』寛政2、『當世心筋立』寛政2、『太平遺響二編』寛政11序）年間

の書物が掲載されていることから、寛政頃の後印本と推定した。

そして、Ⅲグループの S9 は裏見返しに「癸未年」をもつ書入れが確認できた。『勢多』成立年である明和 8 年以降の「癸未」は文政 6 年であるので、その頃までには摺られたものと推測した。また、寛政頃と推定した C1 よりも匡郭の割れなどが増えていることから、書入れと合わせて文化から文政頃の後印本と推定した。W2 は書入れもないが、摺りの状態は S9 と同様であり、こちらも文化から文政頃の後印本と考えられる。

I グループの S2 の摺りの状態を再度確認する。S2 は、S9・W2 よりもさらに界線の割れが増えていることから、文政頃よりも後に摺られたものと考え、S2 の印行年を江戸末以降と推定した。

校合の結果、S4 に記載された明和 8 年を刊年とみなし、その他の資料については後印本として、印行年を推定することができた(表 4)。『勢多』では同版資料でも摺りの状態や、広告・書入れの比較から印行年を推定できる可能性があることが分かった。無刊記資料である S9 や W2 は序文の記載年を頼りに「明和 8 序」と記録してしまう。また S2 は刊記を持っているために特に調査を行わなければ、「明和 8[刊]」となってしまう。しかしそれでは正確な目録とされない可能性がある以上、安易に記載年を記録しないことも必要である。

## 5. おわりに

2 つの事例を踏まえて本報告をまとめておきたい。古典籍資料は版木が彫られた年代を刊年、摺られた年代を印行年とする。刊行された後に、その版木が時代を経て彫りかえられずに摺られることや、刊記部分や誤った個所など一部分を彫りかえて摺られることもある。刊年・印行年を判断することは研究者からも指摘されている通り、資料の精密かつ正確な調査が重要である。資料単独で判断するよりも、複数資料を比較することで、より正確な、充実した目録を作成できる可能性があ

り、校合はその一つの方法である。

校合調査はその特性上、調査時間を要するものの、その結果「刊印」の判断、それぞれの年代を特定あるいは推定できる方法として有用であるということは、2 つの事例から考えても明らかである。刊記の記載年、序文・跋文に記載されている年号を安易に目録へ記録してしまうのではなく、時には刊記の記載を疑うことも必要であろう。また、端本資料を含む無刊記資料を、校合調査の結果に当てはめることで、出版年不明とはせずに、年代を推定し補記することが可能となる。

自館に他伝本がなく校合できない場合であっても、図書館の繋がりを活かし他館とも協力することによって校合が可能となり、結果として出版年不明資料を減らすことにつながる。校合という作業を通して古典籍資料と深く向き合うことで、利用者へ正確な目録が提供できるのであれば、図書館員として取り組むべき調査ではないだろうか。

発表後のアンケートにて、研究テーマを明確にし、その解決策や新たな視点を示す「研究発表」をすべき、という感想があった。しかし、「はじめに」でも述べたように、本発表の課題は明確で、その解決策として選んだのが校合という方法である。もちろん、刊印を推定するためには校合以外の方法もあり、校合によってすべてが判明するわけではない。しかし、会員所属校の古典籍資料という限られた範囲の調査であっても、精密な観察と的確な判断によって、刊記そのものを疑うことも、刊か印かを区別することも可能だということを示し得ただろう。

## 参考文献

- 市古夏生編 2014 『元禄・正徳板元別出版書総覧』  
勉誠出版
- 井上隆明 1998 『近世書林板元総覧』 青裳堂書店
- 井上宗雄ほか編著 1999 『日本古典籍書誌学辞典』  
岩波書店
- 大沼晴暉 2012 『図書大概』 汲古書院

岡雅彦ほか 2011 『江戸時代初期出版年表』  
勉誠出版  
川瀬一馬 1982 『日本書誌学用語辞典』雄松堂書店  
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編 2010  
『図説書誌学』勉誠出版  
鈴木俊幸編 2007 『近世書籍研究文献目録』  
ぺりかん社  
長澤規矩也編著 1979 『図書学辞典』三省堂  
長澤規矩也 1983 『長澤規矩也著作集』第4巻  
汲古書院

中野三敏 2015 『江戸の板本』岩波書店  
廣庭基介, 長友千代治 1998  
『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社  
堀川貴司 2010 『書誌学入門』勉誠出版  
和漢古典籍研究分科会 HP  
<http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kotenseki/>  
図表出典  
図1・2 所蔵館資料を撮影  
表1~4 筆者作成

版本	所蔵	刊記記載文	校合前 出版年	校合後 出版年
寛永8年	【立正】 A12/159	寛永辛未仲春吉旦／書林豊雪齋道 伴刊	寛永8 [1631] 刊	寛永8 [1631] 刊
慶安2年	【駒澤】 H353/51	慶安貳巳丑年林鐘／書林豊興堂新 刊	慶安2 [1649] 刊	慶安2 [1649] 刊
慶安4年	【立正】 A12/591	慶安四辛卯夷則吉旦 中野氏道伴	慶安4 [1651]	[寛永8 (1631) 刊] 慶安4 [1651] [印]
寛文8年	【駒澤】 H35383	寛文八年戊申臘月吉旦書肆重刊	寛文8 [1668] 刊	寛文8 [1668] 刊
寛文11年	【立正】 A12/156	寛文拾一曆辛亥二月吉辰／京寺町 二条上ル町山田屋喜兵衛開板	寛文11 [1671] 刊	寛文11 [1671] 刊
延宝4年	【立正】 A12/157	延寶第四丙辰点孟秋上浣／寺町通 二條下ル町／中村五兵衛開板	延宝4 [1676] 刊	[寛文11 (1671) 刊] 延宝4 [1676] [印]
天和3年	【立正】 SA12/172-10	天和三癸亥仲冬吉旦 中野氏板行	天和3 [1683] 刊	[寛永8 (1631) 刊] 天和3 [1683] [印]
貞享3年	【立正】 A12/564	貞享第三丙寅天仲春上浣／撰陽心 齋橋筋順慶町角／励学堂 河内屋 善兵衛刊	貞享3 [1686] 刊	貞享3 [1686] 刊
元禄4年	【駒澤】 H353/87	元禄三辛未年文月下絃／寺町通二 條下ル町／中村五兵衛／開板	元禄4 [1691] 刊	[貞享3 (1686) 刊] 元禄4 [1691] [印]
元禄4年	【立正】 183.3/Ka12	元禄三辛未年文月下絃／大坂平野 町梅檀木／灰屋三良右衛門	元禄4 [1691]	※継続調査

表1: 『科註妙法蓮華經』リスト

刊	印	
○寛永8年(1631) [京]、豊雪齋道伴	慶安4年(1651) [京]、中野氏道伴	天和3年(1683) 同
○慶安2年(1649) [京]、豊興堂 (=中野小左衛門)	/	/
○寛文8年(1668) *書肆名なし	/	/
○寛文11年(1671) 京、山田屋喜兵衛	延宝4年(1676) 京、中村五兵衛	/
○貞享3年(1686) 大坂、河内屋善兵衛	元禄4年(1691) 京、中村五兵衛	/

元禄4年(1691) ※寛文版と貞享版が交じる  
大坂、灰屋三良右衛門

表2: 『科註妙法蓮華經』刊印リスト

チェックポイント	S4	S5	S6	C1	S7	S9	S10	K1	W1	W2	S1	S2	S3	S8	W3	W4	W5
① 序(義鵬子) 2丁表 匡郭右下割れ	×	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○
② 本文4丁表 匡郭上部割れ	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③ 本文6丁表 「安陀羅校」の<校>はらい	長	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短
④ 序(義鵬子) 1丁表 匡郭右割れ	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤ 序(梅村和中散人) 尾裏 匡郭左部割れ	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥ 序(義鵬子) 4丁裏 2行目下「補」の送り字<寸>の点	○	○	○	○	×	×	×	×	-	×	△	×	×	×	×	×	×
⑦ 本文6丁裏 匡郭左側に割れ	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧ 本文8丁表 3行目「枚」の<ノ>	長	長	長	長	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短
⑨ 本文8丁裏 界割れ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○

◇資料記号について S：成城大学図書館 K：駒澤大学図書館 C：中央大学図書館 W：早稲田大学図書館

◇○：有/該当 △：やや有 ×：なし/該当せず ◇短：短い 長：長い

【印行時期の推定】S4 → S5 → S6・C1 → S7・S9・S10・K1・W1・W2 → S1・S2・S3・S8・W3・W4・W5

表3：『勢多唐巴詩』校合リスト

資料	校合前出版年	校合後出版年
S4	明和8 [1771] [刊]	明和8 [1771] [刊]
S5	明和8 [1771] 序	[天明頃] [印]
C1	明和8 [1771] 序	[寛政頃] [印]
S9	明和8 [1771] 序	[文化～文政頃] [印]
W2	明和8 [1771] 序	[文化～文政頃] [印]
S2	明和8 [1771] 序	[江戸末以降] [印]

表4：『勢多唐巴詩』リスト

※画像の転載について

本資料には駒澤大学と立正大学所蔵の『科註妙法蓮華經』、成城大学・中央大学・早稲田大学所蔵の『勢多唐巴詩』の画像を使用しています。資料画像転載の可否につきましては、各大学へお問い合わせください。